

水籠

伊藤左千夫

青空文庫

表口の柱へズウンズシリと力強く物のさわった音がする。

この出水をよい事にして近所の若者どもが、毎日いたずら半分に往来で箒いかだを漕ぐ。人の迷惑を顧みない無遠慮なやつどもが、また箒を店の柱へ突き当てたのじゃなど、こう思いながら窓の格子こうし内うちに立った。もとより相手になる手合いではないが、少ししかりつけてやろうと考えたのである。

格子から予がのぞくとたんに、板塀いたべいに取り付けてある郵便受け箱にカサリという音がした。予は早くも郵便を配達して来たのじゃなと気づく。

この二十六日以来三日間というもの、すべての交通一切杜絶とぜつで、

郵便はもちろん新聞さえ見られなかつた際じやから、郵便配達と気づいて予はすこぶるうれしい。この水の深いのに感心なことと思いつつ、予は猶予なくその郵便をとり而降りる。郵便箱へ手を入れながら何の気なしに外を見る。前に表の柱へ響きをさしたのは、郵便配達の舟が触れた音でありしことがわかつた。

郵便の小舟は今わが家を去つて、予にその後背を見せつつ東に向かつて漕いでいる。屈折した直線の赤筋をかけた小旗を舷ふなばたはさに挿ふたりんで、船頭らしい男と配達夫と二人、漁船やら田舟やらちよつとわからぬ古ぶねを漕いでいる。水はどろりとして薄黒く、浮き苔うきけのヤリが流れる方向もなく点々と青みが散らばつてちようどたまり水のような濁り水の上を、元気なくゆらりゆらりと漕いでゆく

のである。

いやに熱あつくる、苦しい、南風がなお天候の不穩を示し、生なまあか赤い夕
 焼け雲の色もなんとなく物すごい。予は多くの郵便物を手にしな
 がらしばらくこの気味わるい景色けしきに心を奪われた。

高架鉄道の堤とそちこちの人家ばかりとが水の中に取り残され、
 そのすき間というすき間には蟻ありの穴ほどな余地もなくどつしりと
 濁り水が押し詰へまっている。道路とはいえ心当てにそう思うばか
 り、立てば臍へそを没する水の深さに、日も暮れかかつては、人の子
 一人ひとり通るものもない。活動ののろい郵便小舟がなおゆらゆら漕ぎ
 つつ突き当たりのところを右へまがった。薄黒い雲にささえられ
 て光に力のない太陽が、この水につかつて動きのとれない一群の

人家をむなしく遠目にみておられる。一切の草木は病みしおれて衰滅の色を包まずいたずらに太陽を仰いでいても、今は太陽の光もこれを救うの力が無い。予は身にしみて寂しみを感じた。

静かというは活動力の休息である。静かな景色には動くものがない。静かというは活動力の休息である。静かな景色には動くものなくとも感じはいきいきとしている。今日の景色には静かという趣は少しもない。活動力の凋ちようすい衰すいから起こる寂しい心細いというような趣を絵に書いて見たらこんなであろうなどと考える。

毒々しい濁り水のために、人事のすべてを閉塞へいそくされ、何一つすることもできずむなしく日を送っているは、手足も動かぬ病人がただ息の通うばかりという状態である。

家の中でも深さは股またにとどくのである。それを得避えさくる事でも

きないで、巢を破られた蜂が、その巢跡にむなしくたむろしているごとくに、このあばら屋に水籠りみずごもしている予を他目よそめに見たらば、どんなに寂しく見えるだろう。

しかしながらわれとわれを客観して見ればまた一種得難い興味もある。人間のからだでいえば病氣じや、火難が家の死であれば水難は家の病氣じやなどと空想にふけりながら予は仮床かりゆかへ帰つた。仮床というは台所の隣間となりまで、南へ面した一間ひとまの片端へ、桶おけやら箱やら相当に高さのあるものを並べ立てて、古柱や梯子はしごの類をよろしく渡した上に戸板を載せ、それに畳を敷いたものである。畳もようやく四畳しか置けない。それに夫婦のものと児女三人下げ女一人じよひとり、都合六人が住んでいる。手も足も動かせない生活じや。

立てば頭が天井へつかえる。夜になれば蚊がいる。この四畳のお座敷へ蚊帳かや二つりという次第ではないか。動けないだけに仕事もない。着たままでねる、寝たままで起きている。食物は兄の家からすべてを届けてくれる。子供を水へ落とさないように注意するのが最も重要な事件くらいのもじや。赤ん坊は心配はないが木綿子うこのおぼつかなく立つて歩くのが秒時も目を離せない。今日は木綿子がよく寝たから天井板をきれいに掃除そうじしたとは細君のことである。今日は腰巻きを五へん換えましたとは下女の愚痴である。それもそのはずじや。湯を沸かして茶を一つ飲むとういには、火をこしらえる材料拾集のために担当者が腰巻き一つはどうしてもぬらさねばならない。それが三度はきまりでほかに一度や

二度は水へ降りねばならぬ。で天氣がよければよいが天氣が悪ければ、とても茶を飲むなどという奢りおごは許されない。今日くらしいの天氣ならばラクだとは異口同音のよろこびじゃ。追ツつけ夕飯を届けてくる時刻とて鉄瓶てつびんの湯が快活に沸き立っている。予は同人諸君からの見舞状を次ぎ次ぎと見る。かれこれして家の中は薄暗くなつた。

「おとつさん水が少し引いたよ」

「ウンそうか」

「あの垣根かきねの竹が今朝けさはまだ出なかつたの……それが今はあんなに出てしまつて五分ぶばかり下が透いたから、なんでも一寸五分くらいは引いたよ」

「なるほどそうだ、よいあんばいだ。天気にはなるし、少しずつでも水が引けば寝ても寝心がいい」

「さつきおとつさんおもしろかったよ。ネイおつかさん、ほんとおおかしかったわ、大きな鰻うなぎ、惜しい事しちゃったの、ネイおつかさん……」

「お妙たえさん、鰻がどうした」

「鰻ネ、大きい鰻がね、おとつさん、あの垣根くいの杭くいのわきへ口を出してパクパク水を飲んでるのさ。それからどうして捕とろうかって、みんなが相談してもしようがないの。それからおふじが米ぎるを持ち出して出かけたら、おふじが降りるとすぐ鰻はひっこんでしまったの。ネイおふじ、網ならどうかして捕れたんだよ」

「そうか、そりや惜しいことをしたなア、蒲焼かばやきにしたら定めて五人でたべ切れない大きいものであつたろう。おとつさんに早くそう言えばよかつたハ、ハ、ハ、ハ」

「おとつさんうそでないよ、ネイおふじ、ほんとネイ、おつかさんも見えていたんだよ」

おふじは腰巻きのぬらし損ぞんをしてしまったけれど、そのついでに火を起こしたから、鉄瓶の湯が早く煮立った。それでは鰻が火を起こしたわけじゃないかと、予が笑えば、木綿子ゆうこまでが人まねに高笑いをする。住宅の病氣も今日はやや良好という日じゃ。いやに熱苦しい南風が一日吹き通して、あまり心持ちのよい日ではなかつたけれど、数日来雨は降る水は増すという、たまらぬ不快

な籠こもり居いをやつてきたのだから、今日はただもうぬれた着物を脱
いだよいうな気分であつた。それに日の入りと共にいやな南風も西
へ回まわつて空の色がよくなつた。明日も快晴であらうと思おもわれる空
の気色けしきにいよいよ落ちついて熱のさめたあいのような心持ちでか
らだが軽くなつたよいうな気がする。金魚が軒下へ行列して来る。
鱒どじょうが時々プクプク浮あいて泡あわを吹く。鰻うなぎまで出て芝居しばいをやつて見せ
たよいうありさまだつたから、まずまずこれこれまでにはない愉快な
日であつた。極端に自由を奪うばわれた境きよう涯がいにいて見ると、らち
もない事にも深き興味を感かんずるものである。

人間の家も飯たを炊かぬものであると、朝にも晩にもすこぶる気
楽らくにゆつくりしたものだ。

「もうランプをつけましょうか」

「まだよからう」

「それでもよほど暗くなってきましたから」

「どうせ何ができるでなし、そんなに早く明かしをつける必要もないじゃないか」

こんならちもない押し問答をして時間を送っている。

表のガラス戸にがちやんと突き当たったものがある。何かと思う間もなくしずしずとガラス戸を押しあけて人がはいる、バシャンバシャン水音をさして半四郎君が台所へ顔を出した。

「コリヤ思ったより深い、随分ひどいなア」

「半四郎さん、どうも御苦労さま、とんだ御厄介ごやかかいでございます。

そこらあぶのうございますからお気をつけなすつて……」

「やア今日は君が来てくれたか、どうです随分深いでしょう。上^あげ縁^{えん}は浮いてしまったし、ゆか板もところどころ抜けてるから、君うっかり歩くと落ちるよ、なかなかあぶないぜ」

「コリヤ劍^{けん}呑^{のん}だ、なにももう大丈夫、表のガラス一枚破^わりましたよ、車へ載せて来ましたからつい梶^{かじ}棒^{ぼう}をガラス戸へ突き当ててしまったんです」

「なアにようございますよ、ガラスの一枚ばかりあなた……」

「随分御困難ですなア」

「いやありがとう、まアこんな始末さ。それでもおかげさまで飢えと寒さとの憂いがないだけ、まず結構な方です。君、人間もこ

れだけ装飾をはがれるとよほど奇怪なものですぞ。この上に寒さに迫られ飢えに追われたら全く動物以下じゃな」

「そうですねア 向島むこうじまが一番ひどいそうです。綾瀬川あやせがわの土手

がきれいというんですからたまりませんや。今夜はまた少し増して来ましょう。明朝みょうあさの引き潮にやいよいよ水もほんとに引き

始めるでしょう」

半四郎は飯櫃おほちと重箱とほかに水道の水を大きな牛乳罐かん二本に入

れたのを次ぎ次ぎと運んでくれる。今夕の分と明朝の分と二回だけの兵糧ひょうろうを運んでくれたのである。まア話してゆきたまえと

いうても腰をかける場所もない。半四郎君はあまり暗くならぬうちにといて帰ってゆく。ランプをつける。半四郎君の出でゆく

水の音が闇やみに響いてカパンカパンと妙に寂しい音がする。濁り水の動く浪畔なぐるにランプの影がキラキラする。全くの夜よるとなつた。そして夜は目に映るものの少ないためか、目に見た日暮れの趣にくらべて今は寂しいというより静かな感じが強い。その静かさの強みに、五、六人の人の動きもその話し声もランプの光り鉄瓶てつびんの煮え音までが、静かに静かにと上から圧おさえつけられているようである。かえつて少しの光や音や動きやは、その静かさの強みを一層強く思わせる。湿り気けを含んだランプの光の下に浮藻うきも的生活のわれわれは食事にかかる。佃煮つくだにと煮豆にまめと漬菜つけなという常式じょうしきである。四畳の座敷に六人がいる格で一膳ぜんのお膳に七つ八つの椀わんちある。茶碗やわんが混雑をきわめて据すえられた。他目よそめとは雲泥うんでいの差ある愉

快なる晩餐ばんさんが始まる。一切の過去を忘れてただその現在を常と観ずれば、いかなる境地にも楽しみは漂うている。予はビールを抜かせる。

木綿子ゆうこの挙動には畳四畳の念はない。行きたいようにゆき、動きたいように動いてる。父の顔を見母の顔を見姉の顔を見、煮豆佃煮つくだにのごちそうに満悦まんえつして、腹の底を傾けての笑い、ありたけの声を出しての叫び、この人のためにだれもかれも、すべての憂うき事を忘れさせられる。天地の寂寞せきぼくも水難の悲惨も木綿子の心をば一厘たりとも冒すことはできない。わが身の存在すら知らない絶対無我の幼児は、真に不思議な力がある。天を活かし地を活かし人をも活かすの力を持っている。他目よそめに解せられない愉快

な晚餐というも全く木綿子の力である。

あぶないてば木綿ちゃん、という呼び声はこの会食中にばかり

も十度とたびも繰り返された。あぶないとは何の事か木綿ちゃんの知っ

た事ではない。木綿ちゃんの行動は天馬空てんまくうを行くがごとくで、四

畳であろうが、百畳であろうが、木綿ちゃんにそんな差別はない。

人を活いかす力を持てる木綿ちゃんは、また人を殺す力も持つてる。

木綿ちゃんが寝ないうちはだれも寝られないのである。もしも木

綿ちゃんがわれわれの不注意のために、この水に落ちて死ぬよう

な事でもあつたら、少なくとも予一人は精神的に死するにきまつて

いる。木綿子はその幼い手足を投げ出して、今は眠りについた。

窓先で枝えだ蛙がえるが鳴く。壁の透き間でこおろぎが鳴く。彼らは何

を感じて寂しい声を鳴くのか。空は晴れて膚寒く夜はようやくやくふ
け渡ったようである。

青空文庫情報

底本：「野菊の墓 他四篇」岩波文庫、岩波書店

1951（昭和26）年10月5日第1刷発行

1970（昭和45）年1月16日第24刷改版発行

2007（平成19）年5月23日第49刷発行

初出：「ホト、ギス 第十一卷第二號」

1907（明治40）年11月1日発行

※表題は底本では、「水籠《みずくもり》」となっています。

入力：高瀬竜一

校正：岡村和彦

2019年8月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

水籠

伊藤左千夫

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>